むかしの手口でやっていた
名前かえただけで堂々と

中沢組の新聞記事を読んで、金田組を見に行ったのは、ミゾレの降った三月四日であった。そのことを書いて三、四日後に、意外な話を聞いた。

"今年、一月に博多駅で、大阪で仕事しないかと声をかけられ、承知すると、八幡区ハコザキにある三共興業支店に連れていかれた。大阪へは飛行機で来たが、飯場につくと一人で飯場の外へ出られなくなった。飯場は二階で、事務の部屋の前を通らないと外へ出られない。一階廊下の途中に扉があって日曜日などカギがかかっている。古株の人間はカギを持っているので外へ出れるが、新参ものは、カギを持って ないので古株の人間と一緒でなければ外へ出ることができない。

賃金ももらえなかった。"

この話を聞いた時に、よく似た話もあるもんだと感心したが、念のために、"その飯場は、西淀川の福ですか"と聞くとちがう、という。今は金田組ではなく、三共建設、という名前になっているということだ。

Bさんの話を聞いていた人が、"その飯場にMさん、という人がいたはずだが、知ってますか"とたずねると、Mさんは Bさんより二週間後に入飯してきたが、Bさんがトンコする以前にもういなかった、という答が返ってきた。

その Mさん は、Bさんより早く、賃金の精算を要求して、アバラ五二、三本おられ、トンコして金に来ていた。

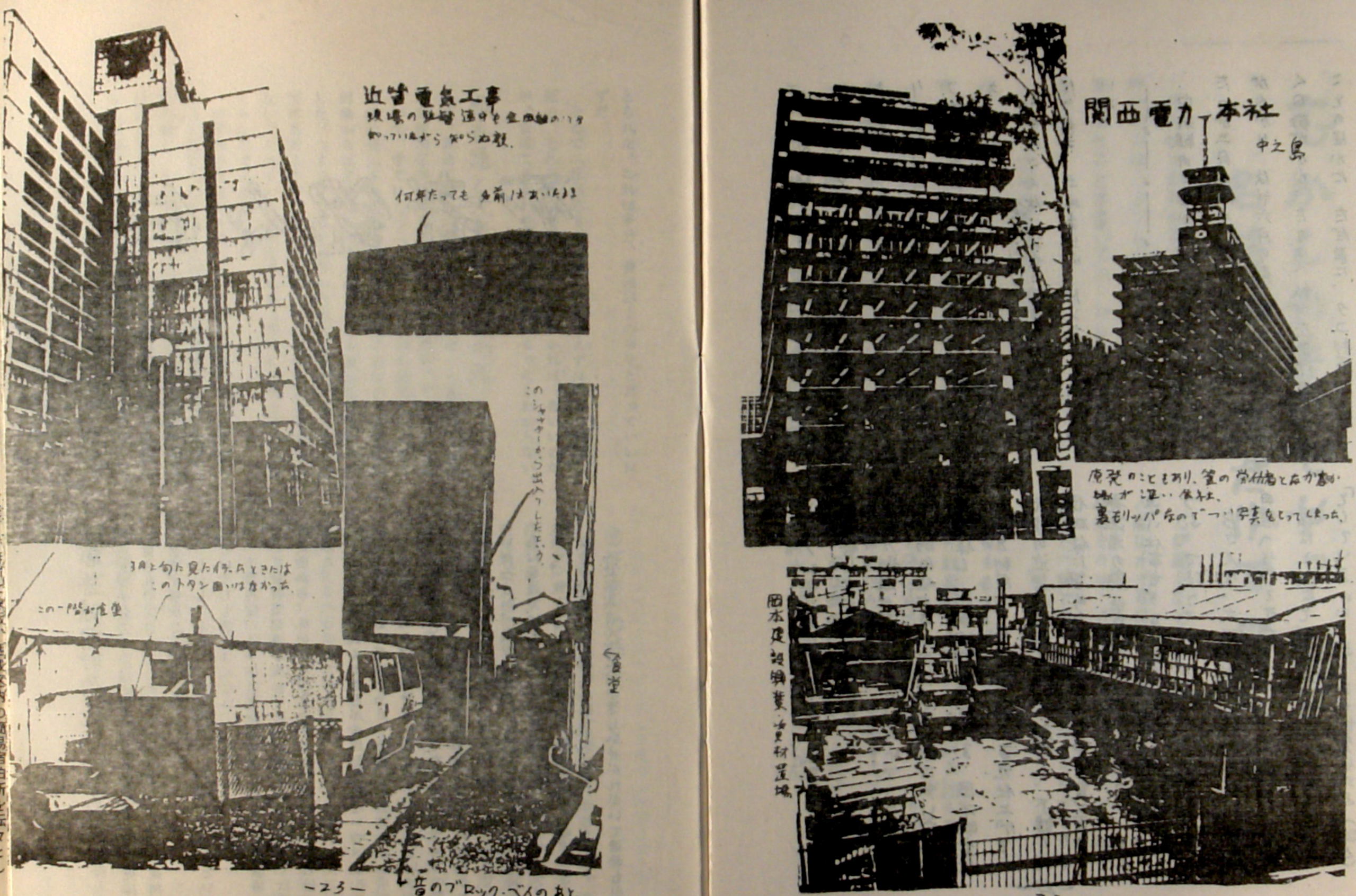
―○―○―○―○―○―

中沢組のことから、飯場のことを書き始めたのが三月の初め、引用ばかりのくせに時間がかかり、はや六月の声を聞く、かくのごとく日数がかかったのは、私がなまけ者であることのほかに、ただ単に、タコ部屋つぶせ、とコブシ振り上げたような事を書く、という姿勢になれないせいもある。

暴力飯場が存在するにはそれなりの理由と社会的存在価値がある。金田組は安い労働力を確保し、岡本興業に提供する、岡本興業はそれを利用し、安く、速く工事を仕上げて元請の近畿電気工事へいい顔をし、下請の地位確保に努めようとする。近畿電気工事は、被災者の関西電力を満足させるために、安く速い仕事をする下請を、多少の問題には目つぶって使う。

Bさんは、大阪へ出る方法、手段として金田組へやってきた。

私はこのことを書くことで、なにをしようとしているのか、まったく無責任だね。(続く)


関西電力本社
中之島
廃発のこともあり、筆の労働となか高い
城が湿い会社。
裏もリッパなのでつい写真をとってしまった。
岡本建設機械・資材置場
近畿電気工事
現場の仕事柄中を全面的にいそがしいからやらぬ様。
何年たっても 多前は古いんだ
3月と旬に見た様なときは
このトタン屋いはなかった。
この一階が食堂
食堂
音のブロック・ベイのあと。